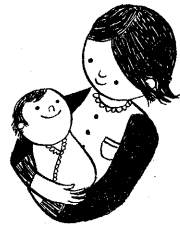


「危ない」を学ぶ

みよしのりえ



「危ないからやめなさい」

子どもを一人育てあげる過程で、世の親たちはいつたいたい何度、この言葉をわが子に向かって投げかけるのでしょうか。

現在、中学二年生と小学五年生の二人の娘をもつ私もまた例外ではなく、ことに幼少期には、かなり頻繁にこの言葉を使っていました。はいはいを始めた生後六か月ごろには、落ちている物を手当たりしだいに口にするわが子に、よちよちと歩き始めた十か月ほどの時分には、裸足で玄関のタタキへと突き進んでいくわが子に対して……というふうには。

子どもたちがだいぶ大きくなった現在では、かなり頻度は減りましたが、それでも時どきはこの言葉を使います。

「危ないよ」と声をかけることは、わが子を危険から回避させようとする、親として当然の行為であり、ごく自然に発せられる言葉です。世の中に未知のことだらけの子どもに、何が危険で何が安全かを教えることは、人間に限らず、地上に生を営む動物たち、皆それぞれ何らかの手段を使って行ってきたことです。それは、種の存続を担う動物の本能ですから。

わが子はアーティスト？



学童期・思春期・成人期における危険回避能力の礎になると私は考えます。

たとえば、歩き始めたばかりの一歳児は、まだ足がふらついて危なっかしいもので、親としては「何とか転ばないように」と願うものですが、転ばないようにするためには、まず転ぶことから学ぶ必要があります。何度も転んで転んで、痛さを知り、そうならないような歩き方を自分自身で会得しなくては

なりません。

冒頭で、私自身「危ないから」という言葉を連発してきた、と述べましたが、あいにくと私の娘たちは、親の言うことを素直に聞き入れる子どもではありませんので、こんなとき、「階段の方へ行っちゃダメよ」などと声をかけても、彼女らは振り向きもしません。階段へまっしぐらです。結果、娘らは生傷の絶えない幼少期を過ごすことになりました

た。私のほうも、追いかけるのに限界を感じ、よほど危険がない限りは、木に登っていようが水たまりで腹ばいになっていようが、あきらめモードで傍観するようになりました。

しかし、そうして失敗とそれに伴う痛みとを幾度となく味わってきた子どもたちは、その分、自分自身はもちろん、他人の痛みへの理解力も培ってきたように思います。まだ成長半ばであり、相変わらず親の言うことは素直には聞きませんが、その点では真っ直ぐ育ってくれていると信じています。

アメリカで感じたこと

ところが最近の親は、危ないものや汚いものを、子どもたちが近づく以前に取り除いてしまう傾向があるようです。

私たち家族は、数年前までアメリカの北東部に住

んでいました。

当時の隣の家には、私の下の娘と同年で三歳前後のお嬢さんがいたのですが、夏場はわが家の娘らが外で遊んでいると、すぐに出てきて一緒に遊んでいたものが、寒くなり始めたころから、ぱったりと姿が見えなくなってしまったのです。病気でもしているのかと心配しましたが、暖かくなったころ再び遊びに来るようになり、ほっとして「冬の間はどうしていたの？」と尋ねてみると、「マミイが、寒いから外で遊んじゃダメって言うの」。その答えは意外なものでした。

確かに、冬はマイナス二十度になることもある寒冷地でした。しかし、零度前後に上がる日も多く、雪もほどよく降り、広い庭をもつ隣の家では、雪遊びには最適な環境です。それなのに外で遊べないというのは、ずいぶんともつたいない話だなど思いました。それと同時に、せっかく四季のある土地にい

ながら、セントラルヒーティングの家の中には全く感じることをできない、凍りつくような冷たい空気を知らずに育つことが、何ともいびつに感じられてなりませんでした。

「最近の子どもはキレやすい」と言われ始めてから数年たちますが、「キレやすい」ことの裏側には、「忍耐力」や「危険回避能力」の欠如があるとうかがえます。この「忍耐力」にしろ「危険回避能力」にしろ、養うためにはまず、我慢したり危険に遭遇したりする場面が必要になります。しかし、たとえば先のアメリカ人の女の子の場合、「寒さに耐える」という、絶好のチャンスを失っています。

もちろん、生命が脅かされるような危険は避けなければなりません。親が必要以上に先回りして、行く道の小石を取り除くようなことは、子どもの成長には好ましくありません。

疑似体験の効用

「危ない」を知るためには体験が必要、と述べてきましたが、かといって安全を脅かすような危険にそうそうさらすわけにはいきません。幼児期以降にあまりに危険な目に遭うと、トラウマになってしまふ恐れもあります。そんなときに一役買うのが、「遊び」と「読み聞かせ」でしょう。

「遊び」では、特に大人数で一定のルールの下行う、ダイナミックな「集団遊び」が効果的だと思います。最近、子どもたちが集団遊びに興じる姿をあまり見かけなくなりました。しかし、たとえば「かくれんぼ」や「鬼ごっこ」などは、「鬼にかまえる」恐怖感と、それにどう対処するか思案する過程、さらには克服できたときの達成感など、日常では得られないさまざまな体験をすることができそうです。TVゲームでも似たような体験ができそうです。

が、こちらは生身の人間相手ですから、気に食わない展開になつてもリセットボタンは押せませんし、走り回れば息も切れるし、誰かとぶつかれば痛みも感じます。まったく体験の種類が違います。

少子化が進み遊び場も少なくなつた今、集団遊びをする機会がなくなつてきているように思います。が、保育の場や子ども会活動などに積極的に取り入れられることを望みます。

一方、「読み聞かせ」での効用は、改めて言うまでもなく、お話の中に入って疑似体験ができることにあります。特に、「民話」「昔話」の力は絶大です。たとえば「かちかち山」では、子どもたちは火や水の恐ろしさを知ることができます。

また、よく知られていることですが、「昔話」には、危険回避や問題解決の方法が隠されています。鬼だの山姥だのに捕まり窮地に追い込まれた主人公が、機転を利かせて難を逃れるというお話は、痛快

であると同時に困難を乗り越える術を子どもたちに教えてくれます。

読み聞かせには、親と子が同じ時間を密接に共有できるという素晴らしい利点もあります。保育者に任せるだけでなく、ぜひ親子でも積極的に絵本を楽しんでほしいものです。

「危ない」を学ぶ。それは体験や疑似体験なくしては、実感として得られるものではありません。そして、幼少時に経験したことの多様さは、思春期以降の精神の柔軟さにつながっていくと思います。

また、物質的な豊かさや引き換えに、交通事故や犯罪といった不可抗力で起こる危険の増大した昨今、子どもから目を離さないことも重要である中、いかに子どもたちに「危ない」を学ばせるか、悩ましい課題であるとも思っています。

(イラストレーター)